

減っているあの場所

岐阜市立岐阜清流中学校 3年

内田 心菜

皆さんは今、自分の家や仕事がなくなったらどうなってしまうと思いますか。きっと、生きることやお金に対して不安に思う人が多いと思います。私たちでもそう思うのに、障がいがある人たちは今、その状態におかれています。年々減少している「就労継続支援事業所」この事業所は、障がいのある人でも、働くことができる場所です。ここがなくてはならない場所と強く思うようになったきっかけは、私の弟「ナオヤ」です。

ナオヤは、自閉症スペクトラムと言う障がいを中心に、発達障がい、知的障がいがあります。だから彼は、言葉を話すことができません。そんなナオヤを昔の私は、ロボットみたいと思っていました。ナオヤは、大きくなりデイサービスという学校のようなところに行くようになりました。ナオヤは名前を呼ばれても反応しないので近づいて話をしていました。そんな日常の中で訪れたある日のこと。いつもどおり彼の名前を呼びました。「ナオヤ」と。その時、彼の黒い髪がサラッと動き、振り返ってくれました。私は、反応してくれた嬉しさと、福祉関連事業所であるデイサービスで働く方の存在の大きさが、その瞬間、同時に込み上げてきました。そのことがきっかけとなり、私は福祉に関わる職業を目指し始めました。作業療法士、理学療法士、社会福祉士など、たくさんの福祉に関わる職業を知りました。ですが、多くの職業を知れば知るほど、それらの職業は本当に私がやりたいことではないのではないかというモヤモヤが大きくなっていました。

そして今、事業所や障がい者の人でも働ける場所が減っていると聞きました。このことが何を意味するのか自分に問いました。それはナオヤのように障がいがありながらも、成長している子の希望の光が隠れてしまっているということなのです。母からも心配の声を聞きました。では、なぜ必要な場所が減っているのでしょうか。それは一番にお金に関する問題で、施設は潰れていってしまう一方的な状態になっています。それなら、商品の値段をあげればいいと思う人もいます。しかし、障がいがある人の多くは、変化に敏感です。皆さんは、そんなことと思うかもしれませんが値段を変える過程の中でストレスが溜まります。また、障がいがある人の商品と障がいがない人の商品が同じ値段だと、当然障がいのない人の方が売れます。事業所で作られた商品は、安くないと売れないのが現状です。この時私は思いました。どんなことにも大きな壁があります。しかし、壁があったとしても乗り越えられない壁はありません。それを信じ、考え続けた結果、私が本気でやりたいことが見つかりました。それが、「自分で就労継続支援事業所を建てること」です。

私は、大きな権利もお金も、もちろん高い能力も持っていません。今の私にあるものは、ナオヤとの経験、アイデア、そして強い想いです。福祉関係の仕事に就きたいという軸は今も変わっていません。変わったのは「今ある既存の事業所で働くこと」がゴールではなく、「自分で建てた事業所で働くこと」がゴールになったことです。

もし、私の目標や思い、経験によって建てられた事業所がたくさん増え、私と同じ思いをもつ人と、その想いの分だけ事業所が増えれば、それに比例して増えていくのは、ナオヤのような障がいをもった人たちの生きやすさと笑顔だと私は思っています。どんな小さな声も集まれば大きな力になる。私は、この言葉を実現してみせ、その結果を期待以上のものにして、事業所と生きやすさを増やし、理想や思いを形にしていけることを約束します。